卒業論文の要旨

論文題目	相模原障害者殺傷事件にみる優生思想と根源悪の問題について ―サイコパスに関する脳科学の知見を手がかりにして―
氏名	伊藤由佳
メジャー	倫理学

（要旨） 本論文は、相模原障害者殺傷事件(2016 年 7 月)の犯罪実行者を背後から支えている優生思想と根源悪の問題についてカント倫理学の見地から分析し、今後も起こりうる同類の犯行の再発防止のための基本的な解決策を分析・考察したものである。

具体的には、第Ⅰ章において現代社会にみられるサイコパス（反社会性パーソナリティ障害）の実態（その定義や機序、治療可能性や予防可能性など）を最近の脳科学の知見を手がかりに確認している。第Ⅱ章では、上記事件の背後にあるものに照準を定めて分析している。具体的には、カントの『道徳形而上学の基礎づけ』の言説を手がかりにして、人間の根底にある「根源悪」論と優生思想の関係性を捉え、これを解決する「理性的な存在者一般」による「人格の陶冶」の意義に注目しつつも、こうしたカントの理論仮設の限界点を見極めたものである。

筆者の問題関心からする本論文の結論は、以下の通りである。上記事件は、実行犯個人に内包される反社会性パーソナリティ障害からのみ自然発生したものではなく、同様の障害を抱える人々への対処の不徹底さや現行の障害者支援のあり方、そして障害者を支援する職員の待遇や人権意識の啓発など多様な問題が複雑に絡み合い惹起されたものである。今後、同じような事件が繰り返されないようにするには、上記事件の深層にある反社会性パーソナリティ障害と優生思想の相互作用から発生する種々の環境リスクを多角的に検証・解明し、再発防止のための実行可能な具体策を立案・遂行し、同時に検証しつづけることが必要かつ不可欠である。

（指導教員の推薦のコメント）

本卒業論文は、現代の脳科学の知見を踏まえたサイコパス（反社会性パーソナリティ障害）分析を手がかりとしつつ、現代の日本社会に深い衝撃を与えた相模原障害者殺傷事件と実行犯が自らの信念とする優生思想の関連性を、西角純志『元職員による徹底検証　相模原障害者殺傷事件―裁判の記録・被告との対話・関係者の証言』ならびにカント『道徳形而上学の基礎づけ』の言説に内在しつつ考察したものである。その際、問われるのは人間の自然傾向としてある「根源悪」をいかに陶冶するかである。しかし、ここで真に問われるべきは、カントのいう「理性的存在者一般」の立場から「人格の陶冶」がどの程度可能なのか、という点であるだろう。

本論文の著者はカントの「理性的存在者一般」という見地の限界を指摘したうえで、この難問に応えるべく、現代脳科学において分析されるサイコパスと優生思想が複合・融合し、そこに成立する「根源悪」の問題を邪悪なるものの自己破壊性（A・ヘラー）の病理として捉え返したうえで、その病理構造の成立・発現を抑止・予防するための方策を人権擁護の視点を採り入れて考察・提言している。

この著者の問題関心による当該問題に関する道徳哲学的な考察と実行可能な再発防止策の提示は、現代社会にとって極めて意義のある提案であると言える。

以上の理由から、この度提出された伊藤由佳の当該卒業論文を 2022 年度のリベラルアーツ学群・優秀論文として推薦する。